

Ⅲ 検 出 遺 構

今回検出した主な遺構は、西三坊大路、五条条間路、南北小路、側溝5条の条坊遺構と坪内の建物6棟、塀5条、井戸2基、土壌などである。以下、条坊遺構、建物、井戸について記述する。

1 条坊遺構（第3図、図版2・3）

平城京右京における条坊遺構はこれまで西隆寺、唐招提寺などで一部検出したにとどまっていたが、今回の調査で2、3の知見を得、とくに丘陵部の条坊遺構を発見したことは京条坊復原に重要なより所となろう。調査地が右京五条四坊三坪の全域を包括するため、坪の四周にトレンチを設定し、予想位置に西三坊大路、五条条間路、七坪と三坪の間の小路の痕跡を確認できた。

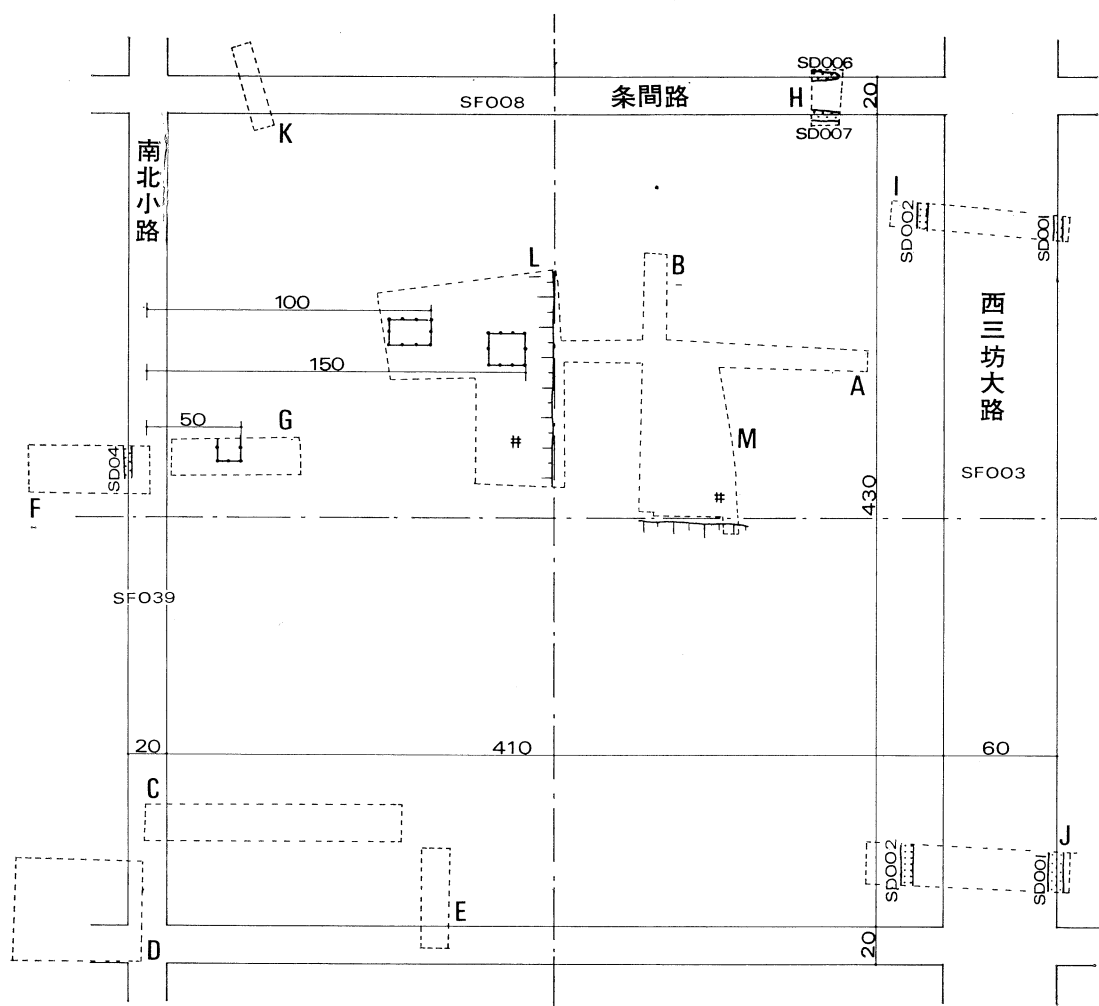
西三坊大路SF003 I、J両トレンチ東端に幅1～2mのSD001を、西端に幅1.7mの溝SD002をそれぞれ検出した。両溝を大路側溝とすると、心々距離がJトレンチ78.5尺（23.24m）、Iトレンチで73.75尺（21.83m）となり、溝心々で推定大路幅60尺より広くなる。SD001の方位は国土基本図方眼北に対してN15°50′Eとなり、SD002はN1°03′21″Eとなる。後者の振れは大きいめしばらくおき、前者について考えてみたい。SD001を大路東側溝と仮定して、溝心より30尺（推定大路 $\frac{1}{2}$ 幅）西の位置を大路心とすると西三坊大路心から朱雀大路心までの計測値1601.93mを得る。この値を朱雀大路の調査で明らかにされた平城京の方位N0°15′41″Wで換算（以下の数値は同様の方位で換算）すると1600.052mとなり基準尺0.296で除すと5405尺（ $\equiv 3 \times 1800$ ）となり、1800尺の基本方眼地割りにほぼ一致することが明らかになった。

条間路SF008 Hトレンチで幅1.2mのSD006と幅1.1mのSD007の両側溝を検出した。側溝心々距離20.16尺（5.97m）となり、従来検出されている小路と同じ値を示す。条間路は小路より広く4～8丈と推定されているため、今回検出の2本の溝が条間路の両側溝を示すものか今後の調査が必要であろう。この条間路心と平城宮西面南門心を計測すると1594.643mを得、基準尺0.296mで除すと5387.3尺で、基本方眼地割り5400尺に対して12.7尺北に寄っていることが判明した（唐招提寺講堂修理の際確認の小路計算からは131.62m（444.6尺）で5尺ほど北寄り）。これは施工誤差か東西軸線の振れによる影響と思われる。なお、Kトレンチでは両側溝とも削平されていた。

南北小路SF039 Fトレンチでみると、SD004が前述の西三坊大路心より135.973m（459.36尺）の計測値を得、坪計画寸法450尺+10尺（小路 $\frac{1}{2}$ 幅）460尺の近似値を示し、この溝に流れ込む暗渠SX041、近接して建つ建物SA042と関連して西小路西側溝と考えられる。

なお、南小路についてはE、D両トレンチとも、後世の攪乱のため確認出来なかった。

以上、三坪の条坊について検討したが条坊の地割痕跡が残る東、北、西については道路側溝の一部が確認出来た。これらを基に坪の中軸線を求めると第3図のように、三坪の地形の東西、南北方向に段差が出来る部分にそれぞれ中軸線が位置する。また後述するように建物の柱通りが坪計画の完数尺に位置することが判明した。これらのことから平城京周辺部に於ても、厳密な条坊制の施工、条坊内の宅地割などが行われたものと思われるが、今回の調査は一部に過ぎず、今後の調査によって更に資料が増加することが望まれる。



第3図 右京五条四坊三坪の占地（数値は尺）

地 点 名	X	Y	備 考
朱 雀 大 路 心	—147833.000	—18577.850	「平城京朱雀大路発掘調査報告」
朱 雀 門 心	—145994.500	—18586.320	平城宮16次調査
西 面 南 門 心	—145753.390	—19093.310	平城宮15次調査
西 三 坊 大 路 心	—147424.000	—20179.785	平城宮100次調査
唐招提寺講堂東西小路	—147218.000	—19438.000	「国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書」
五 条 条 間 路 心	—147353.135	—20208.000	平城宮100次調査
二 条 大 路 心	—146018.180	—18586.320	平城宮16次調査 朱雀門心より80尺南

条坊関連計測座標表

2 建 物 (第4・5図、図版4・5)

検出した奈良時代の建物はLトレンチ3棟、Mトレンチ1棟、Gトレンチ2棟の計6棟である。他に建物に関連した塀3条がある。建物はいずれも小規模な掘立柱建物で、発掘面積に比して棟数も少ない。建物には重複関係や方位の異なるものがあり、A、Bの2時期に分れる。

A期は平城京造営方位にそったもので、SB025・027・035・SA028・029がある。

SB025 Lトレンチ北西部にある桁行4間(8.78m)、梁行2間(3.94m)の東西棟建物で東妻廂をもつ。西妻廂は調査地区外のため不明である。柱間は梁行が南間6尺北間7尺で、桁行が身舎7尺等間、廂の出8尺である。なお、南面中央側柱掘形に接して、墓墳SX030を検出した。

SB027 SB025の東側にある桁行3間(5.65m)梁行2間(4.65m)の東西棟建物である。南面東端1間に廂が取り付く。桁行は6尺等間であるが南面では廂の付く東端間をわずかに広くする。梁行は北間6尺、南間9尺、廂を5尺とする。なお、SB027の北部をL字形に画する南北2間(3.1m)東西3間(4.6m)塀SA029と南側柱の西延長線上に1間の塀SA028がある。

SB035 GトレンチのSB034と重複する梁行3間(4.88m)の西面廂付き南北棟建物である。桁行は南側1間分(1.83m)を検出した。柱間は桁行が6尺で、梁行が身舎6尺等間、廂4尺である。身舎の南西隅掘形の柱位置には塀が据えられていた。

B期は平城京造営方位より北で西へ0.5-2度振れたもので、SB017・026・034・SA018がある。

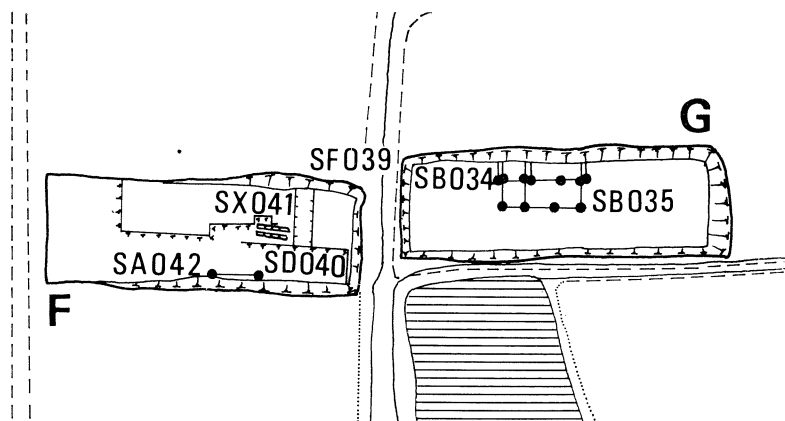
SB017 Mトレンチ西端にある梁行2間(2.16m)の東西棟建物で、東妻側柱を検出した。梁間は9尺等間である。なお東妻側柱の南延長線上に20尺離れ南北1間(3m)の塀SA018がある。

SB026 SB025とSB027の間にある桁行3間(5.51m)梁行2間(3.82m)の東西棟建物である。柱間は桁行、梁行ともに6尺等間である。

SB034 GトレンチSB035と重複した梁行3間(4.88m)の西面廂付き南北棟建物で、南妻側柱のみを検出した。梁行は身舎が6尺等間、廂が7尺である。

そのほかAトレンチで南北1間(約2m)の柱列SA012、Fトレンチで東西1間(約3m)の柱列SA042を検出した。なお、宅地として最適地であるSE015を中心とした高台からは1棟の建物を検出したのみ

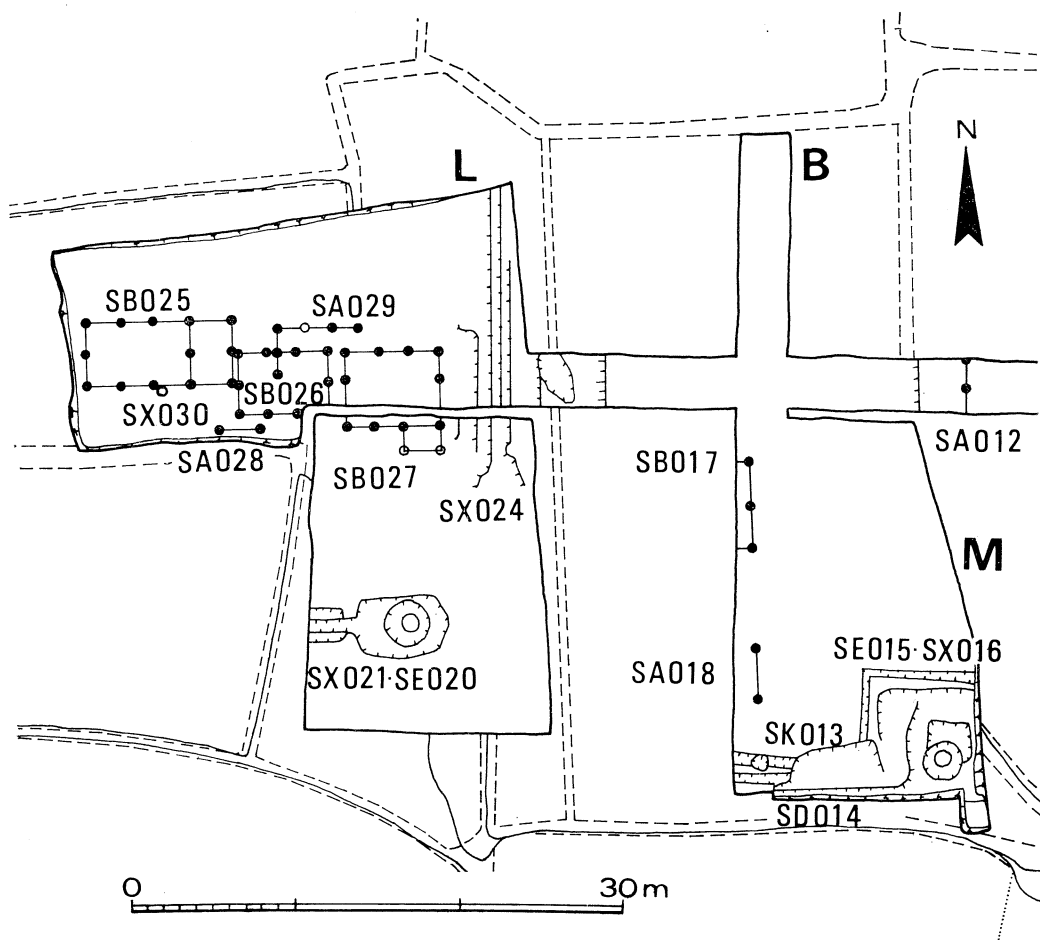
であった。しかし遺構面が現地表から20~30cmと浅く、後世の開墾によって中心部が削平された可能性が強い。遺物が高台の西斜面から二次堆積で多量に出土することからも裏づけられよう。



第4図 F・Gトレンチ遺構図

建物の年代 建物は前述したようにA、Bの2期に区分されるが、建物の存続年代を明らかにする遺物はいずれの柱掘形からも出土していない。しかし、建物周辺から出土する土器は平城宮Ⅰ期（710年頃）から平城宮Ⅲ期（750年頃）のものであり、建物に付設した井戸S E020の廃絶期を示す土器もⅢ期のものである。これらの事実から、その存続年代は、平城京造営とともに始まり8世紀後半にはすでに居住空間としての機能を失なったものと考えられる。また、S B025に接して検出された蔵骨器は建物が廃絶した8世紀後半に埋納されたものであろう。

宅地割り 三坪は東南から中心部に向かって谷が入り込んだ起伏のある地形となっている。こうした地形的な制約のため建物は主に坪の北半部にみられ、谷を南に見渡して建てられている。建物は大きく2つの地域に分れる。すなわち、L、Gトレンチを含む標高77m前後の谷頭のゆるやかな傾斜地と、その東に階段状遺構S X024を境としてひろがるA、B、Mトレンチを含む標高80m前後の平坦地の2地域で、それぞれに井戸S E015とS E020をもつ。階段状遺構S X024は坪の東西心にあり、また南北心を境として宅地と谷筋に分れる。したがって、地形的な制約を受けながらも、大まかな宅地割りとして1/4町以下で一つのまとまりを持つ傾向があるといえよう。



第5図 A・B・L・Mトレンチ遺構図

3 井戸 (第6図、図版6)

台地上のMトレンチで方形の階段状遺構S X016を伴う井戸S E015と、この地区より1段低い谷頭のLトレンチでS E020とその付属施設S X021を検出した。

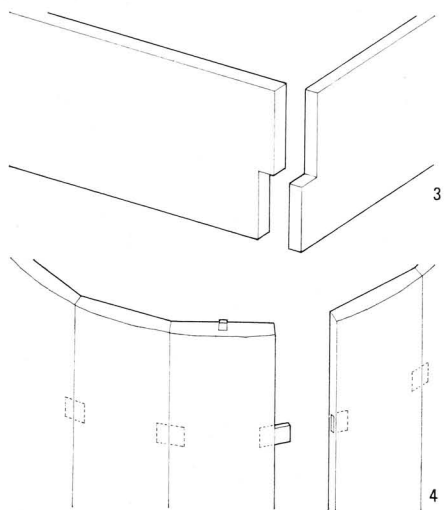
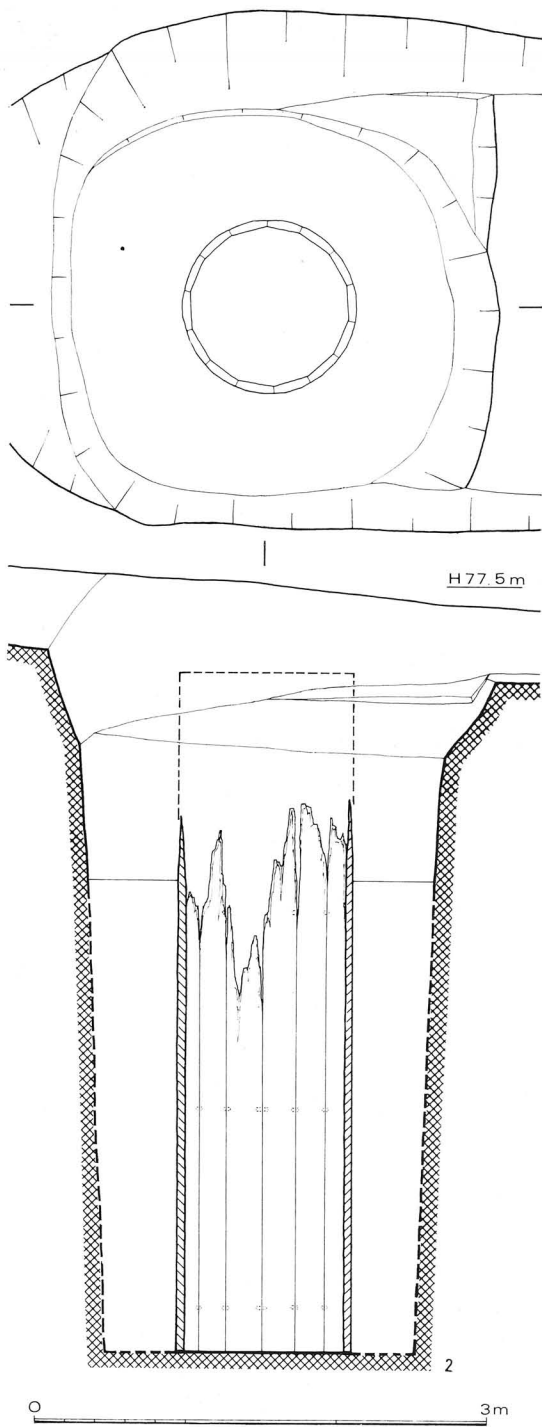
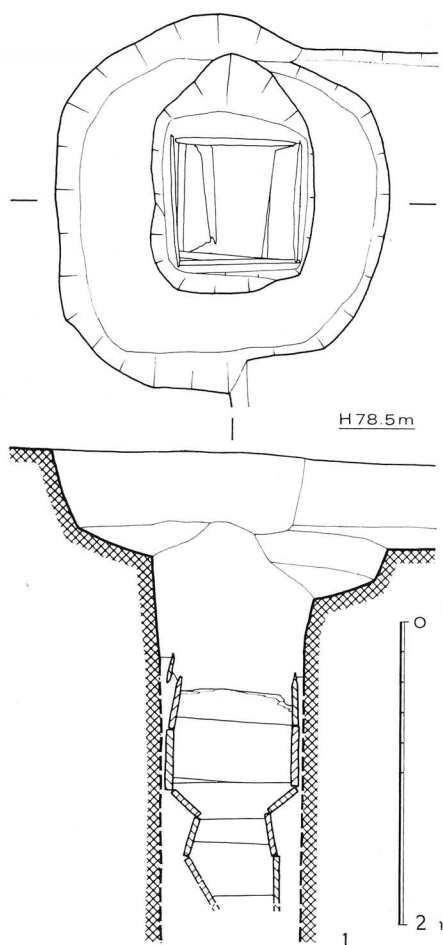
S E015・S X016 S E015は一辺0.8mの井籠組の井戸である(1)。枳板は長さ90cm、厚さ5cmで、材の対角になる二隅を切り落して仕口とする(3)。材の幅は各段で異なり28cm～40cmで、6段目まで確認した。掘形は2段につくられ、上段が一辺2.1mの隅丸方形、下段が一辺1.1mの不整形方形である。井戸の深さは上段の掘形から約3mまで確認したが、それ以下については、検出時に崩壊したため、細部は不明である。

S X016は、S E015の周囲を四段に掘込んだ遺構である。井戸を深く掘り下げるために階段掘りした結果であろうが、井戸構築後は、最下段を埋戻して洗場とし、上三段に周溝を掘り、井戸に降りる際の階段として整備したものと考えられる。南西部は土壌S K013、S D014によって破壊され南側は未検出であるが、全体のプランを復原すると次のようになる。計4段に掘込んだ第1段目は一辺8.6mの正方形となり、深さ0.6mである。第2段は第1段の底の周囲0.6m～0.8mの平坦面を残して掘込んでいる。一辺6.4mの正方形となり、深さ0.4mである。第3段は第2段の東部に片寄せて掘込む。長さ6.7m、幅4～4.8mの長方形となり、深さ0.5mである。以上の3段には壁ぎわに沿って幅0.1～0.2mの溝が巡っている。第4段は第3段のほぼ中央を掘込んでいる。一辺2.8mの正方形となり、深さ0.5mである。井戸の掘形はこの最下段の掘込みの南部を切り込んで設けられており、S X016の中心から東南方向に1.4mずれた位置にある。

S E015から出土した遺物は少ないが、S X016からはかなりの量の土器が出土した。これらの遺物及び遺構の状態からみて、S E015・S X016は構築後比較的早い段階で崩壊し、廃棄されたようである。その時期は、遺物から8世紀前半と考えられる。

S E020・S X021 S E020は径1.1mの円形縦板組の井戸である(2)。井戸枳は、幅28cm、厚さ6cmの細長板材14枚を縦に組んでおり、各板は上中下の3箇所を雇柄で固定する。枳材は円形に組むために両側辺を鋭角につくり、外面を中高に削り曲面にしている。枳材の高さは2.6～4.1mであるが、井戸内には同工の板材が計6枚落込んでいた。残長1.1～1.9mで、木口から25cmの位置に柄孔がある。この板材を転落した井戸枳の上部とすると柄穴の間隔から、高さ4.5mに復原できる。また6枚のうち2枚には木口面に幅2cmの柄がある。おそらく円形の井戸枳の上に方形の枳を組み、それを4箇所固定した柄であろう(4)。なお落込んだ板材の1枚には外面上部に「木」の刻字があった。掘形は2段になり、上段は長辺5.4m、短辺3.2mの不整形な長方形で下段は一辺2.5mの隅丸方形である。井戸の深さは、掘形上面から約5.1mである。

S X021は、S E020の上段の掘形内にある長さ1.5m、幅3.2mの平坦面と谷側に向って下降する幅0.3mの溝状遺構である。これらはプランからも埋没の状況からもS E020と併存するものであり、井戸に付属する洗場とその排水溝と考えられる。この洗場は井戸枳上端と推定した位置からわずか10cm低いみであるが、方形の上枳が考えられるので井戸枳との比高差は充分であろう。S E020・S X021からは、土師器、須恵器のほか若干の木製品が出土した。これらの遺物から、S E020・S X021の廃絶の時期は8世紀中頃と考えられる。



第6図 1 SE015遺構図 2 SE020遺構図
3 SE015井戸枠組模式図
4 SE020井戸枠組模式図